

本講義の対象は、「性能向上などを目的として開発された商品やサービスが、コスト、品質、環境など、総合的に判断して、果たして社会に受け容れられるのか」という判断のための取り組みについてである。

このような、性能、コスト、品質、環境といった、商品やサービスが社会に受け容れられるための要件は、例えば、性能や品質保証のレベルを上げればコストが上がるように、往々にして相反するものであり、トレードオフの関係にある。もちろん、このようなトレードオフの取り扱いには、これまでの企業活動の中で当然行われてきたわけであるが、これまでそれは主に「何かを目的に開発したもののコストダウンと品質保証」に対してであった。

現在の問題は、そこに新たに「環境に優しいか（環境効率が高いか）」という評価指標が入ってきている点である。「環境に優しいか」という指標は、ゴミ・汚染物質をなるべく出さない、省エネ、省資源、温室効果ガスやオゾン層破壊ガスの極小化、等々、極めて多岐にわたり、それぞれがトレードオフの関係にもある。また環境効率は、性能、品質、コストに比べて定量化しにくいし、仮に現在のある地点でのデータや価値観で評価しても、その結果は一般に時間的空間的に普遍ではないと言う意味で不確実性の高い指標でもある（対策を立てない方が良かったということもありうる）。以上のようなことから、環境を考慮した企業活動においては、従来の企業の意志決定プロセスが通用しなくなっており、多くの混乱が生じている。このことは特に、温室効果ガスを原因とする気候変動が現実のものとなり、石油高騰によるエネルギー価格の高騰が遠い将来の話ではなくなってきた1990年代から顕著になってきている。

本講義では、このような状況下において、科学的・合理的に意志決定をするために考えられている方法論についてそれぞれ解説する。解説内容のキーワードは次のようなものである。

- 持続可能性、公平性、ファクターX
- 気候変動問題、地球温暖化対策、エネルギーセキュリティ
- 循環型社会、ゼロエミッション、3R、リサイクル法、PRTR
- ISO、ISO9000（品質管理）、ISO14000（環境管理）、LCA、DfE
- 社会受容性評価、合意形成、情報開示、CVM、コストアセスメント、グリーン調達
- 不確実性評価、ロズリグレット分析、リスクアセスメント、リスクマネジメント、リスクコミュニケーション